文藝賞史上最年長63歳、渾身のデビュー作!

第54回 文藝賞受賞作

『おらおらでひとりいぐも』

若竹千佐子　●本体1200円＋税

●桃子さんは私のことだ、私の母のことだ、明日の私の姿だ、と感じる人が大勢いるはず。
——斎藤美奈子氏(文芸評論家)

●「老い」をエネルギーとして生きるための、新しい文学が生み出された。
——藤沢周氏(作家)

●人の気持ちは一色ではないということを、若竹さんはよくぞ摑んだ。年を経たからこその、若々しい小説。
——保坂和志氏(作家)

●取り返しのつかない命のなかで、個人の自由や自立と、その反対側にある重くて辛いものも含めた両方を受け取って、人生を肯定的にとらえるまでにいたったのが見事。
——町田康氏(作家)

絶賛と感動の声、続々!

●ほんとはね、ほんとは「独りがいい」。出会いも歓びだが、死別も解放だ。地声で語られた女のホンネが炸裂！
——上野千鶴子氏(社会学者)

●ゲラゲラ笑いながら読み始める音読すると更に可笑しい
女74歳、僕は73歳　潜行して読み進める、嗚呼、嗚呼　読了しての感慨‥‥内緒
——久米宏氏(司会者)

●死すことのない共同体の言葉。それが支える「老い」の姿に初めて触れた。「頭の中に大勢の人たちがいる」ことは、きっと孤独ではない。——小林紀晴氏(写真家)

●小説というのは、書かずにいられない人が書くべきなのだと改めて感じさせられた。
——成田本店みなと高台店　櫻井美怜氏

●将来の私であり、みなさんの姿であると思います。不安は減らないけれど覚悟はできた。そんな読後体験でした。
——喜久屋書店阿倍野店　市岡陽子氏

©小林紀晴

子どもの頃から小説を書くと思っていた。テーマが見つかるのに63年という時間が必要だった。小説の神様は気長に待ってくれた。焦らず、手応えのある言葉で書いていきたい。心の探索と社会への目線を忘れず、小説、なまけないで頑張ります。(朝日新聞 11月8日夕刊より)